様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１２０８

研究課題名（和文）感性の涵養とコミュニケーション能力育成のための俳句指導法の開発

研究課題名（英文）A study on teaching haiku to nurture aesthetic sensitivity and communication competence

研究代表者
中西　淳（Nakanishi, Makoto）

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：１０２６３８８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,500,000円、（間接経費）　750,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、感性の涵養とコミュニケーション能力育成のための、国際交流による俳句指導法を探るところにある。まず、北米における俳句教育に関する情報を収集した。その結果、シラブル数にこだわる形式重視の授業が多いこと、我が国の句会のようなコミュニケーション重視の授業はあまり行われていないことが明らかになった。そこで、カナダの教師を対象として、コミュニケーション重視の俳句ワークショップを行った。その結果、その俳句ワークショップの有用性が検証された。さらに、国際交流を展開するための俳句指導のあり方に関する示唆も得ることができた。

研究成果の概要（英文）：This purpose of this study is to explore an effective method of teaching haiku to nurture aesthetic sensitivity and communication competence for elementary school children through international haiku exchange. First, I surveyed how haiku is taught in North America by reading haiku books, such as teachers' guidebooks on writing haiku. The result showed that structure-based (not content-based) instruction is dominant while communication-based instruction, such as Kukai in Japan, is rare in North America. Second, I conducted a communication-based haiku workshop for elementary school teachers in Canada to enhance their deeper understanding of haiku instruction. This haiku workshop proved useful and effective, and I obtained implications for effective method of teaching haiku for international haiku exchange.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：俳句　haiku　コミュニケーション

１．研究開始当初の背景

学習指導要領において、伝え合う能力や主体的な表現能力の育成が強調されて久しい。しかしながら、学習者のそれらの能力は決して高まっているとはいえない。その要因として、インターネットやテレビゲームなど身体感覚を伴わないメディアが氾濫し、身のまわりの世界を自らの感性で捉えていく機会が、また、伝え合うことによって他者との関係性を創り出していく機会が少ないということがあげられる。伝え合う能力を育成するためには、感性を働かせ他者との関係性を創り出していく授業が必要とされる。研究テーマの対象となっている俳句は、「座の文芸」とも呼ばれ、その授業を展開するに適した教材であるといえる。

一方、海外において俳句は、現在、世界 50 か国以上で、30 ちかくの言語を用いて作られている。特に、北米における俳句の歴史は 100 年以上に及び、現在はその歴史の第５ステージに入っている。また、北米の学校教育におけるその歴史は 50 年以上に及び、現在は、詩教育の一環として俳句の学習が定着している。

このことは、俳句が、我が国の学習者と海外の学習者とを結ぶ魅力的な教材となる可能性があることを示している。それによる双方の学習者に対する効果として、次の３点が期待される。自国の言語及び文化を世界的な視野において相対化することができる。自然や生活に関する世界の問題を共有することができる。感性の涵養と言語の洗練を多角的に図ることができる。

以上のことを背景として申請者は、国際交流を展開していくための俳句の指導法の開発を行ってきた（中西、2005、2009）。その結果、「取り合わせ」と「句会形式」を用いた指導法は北米においても有効であること、短詩に対する学習者の感性には国を超えて共通するものがあり、言語や文化が異なっても交流によって互いにそれを磨きあっていくことは可能であることが確認された。それとともに、俳句に対する考えや文化的背景の違い、そして翻訳のあり方など、俳句による国際交流を展開するための課題も浮かび上がってきた。

なお、このような発想のもとに、我が国の学習者と海外の学習者とを繋ごうとする教科学習の研究は、現段階においてほとんど見られない。

（文献）

中西淳（2005）「俳句の指導法の開発―コミュニケーション媒体の視点から―」全国大学国語教育学会編『国語科教育』58 集 pp.82-89

中西淳（2009）「北米におけるハイク指導の実践的研究」全国大学国語教育学会編『国語科教育』66 集 pp.59-66

２．研究の目的

本研究の目的は、児童の感性の涵養とコミュニケーション能力育成のための、国際交流による俳句の指導法を開発するところにある。そのために、まず、北米における俳句教育の現状を捉える。ついで、国際交流を実りあるものとするための、教師を対象とした俳句ワークショップを行い、その有用性を検証する。さらに、それらをもとに俳句指導のあり方を検討する。

３．研究の方法

(1)　これまでの研究の整理・検討

これまで取り組んできた研究（『感性の涵養とコミュニケーション能力育成のための実証的・国際的俳句指導の研究』（平成 19 年度~平成 21 年度・基盤研究(C)）の集約を行い、研究を進める上での課題や方法を確認する。

(2)　北米の俳句界の動向の把握

学校教育における俳句の取り扱いと俳句界におけるそれとは異なっている。現在の俳句界において、それがどのように取り扱われているのか、また、それがどのように親しまれているのか、俳句カンフェランスなどに参加し、その具体を把握する。

(3)　北米の俳句教育の整理・検討

北米における俳句を用いた教育の現状を、近年に発刊された教師用俳句創作ハンドブックなどを手がかりとして捉える。

(4) 我が国の俳句及び俳句教育に関する情報の発信

円滑な国際交流を図るために、我が国では、俳句がどのように取り扱われ親しまれているのか、それに関する情報発信を、俳句カンフェランスでの発表を通して行う。

(5)　国際交流を実りあるものにするための、教師を対象とした俳句ワークショップの実施と俳句指導のあり方の検討

俳句による国際交流を実りあるものするための、教師に対する俳句ワークショップを北米で行い、その有用性を検証する。さらに、教師と協同で授業を行うことによって俳句指導のあり方を検討する。

４．研究成果

(1)北米における俳句教育の現状把握

2011 年に出版された教師用俳句創作ガイドブック Terry Ann Carter 著『Lighting the Global Lantern』などから、北米における俳句教育の現状が次のように明らかになった。

俳句を学ぶことは、言語教育のみならず環境教育としても意味があると考えられていること。俳句の定義には我が国との相違はあるものの、創作及びその指導のあり方には共通する点が多く見られること。俳句は ESL 教室や学校プロジェクトにも活用されていること。若者のためのカンフェランスが開催されていること。俳句大会、俳句競技会、コミックスの制作、本作りなど、俳句に関する多彩な楽しみ方がなされていること。北米の文化に見合った俳句の模索がなされていること。

特に、シラブルカウントの練習になりがちな俳句授業を打開するための、「exploring and reading haiku」「writing haiku」「publishing haiku」の三段階からなるワークショップ形式の授業の提言や、「俳句的瞬間」を感じ取らせていくための、文学の作品を用いた創作支援方法に関する提言は、我が国における俳句指導及び創作支援方法と共通するところがあり、興味深いところであった。

ただし、全体的な傾向として、シラブル数にこだわる形式重視の授業が多いこと、我が国の句会のようなコミュニケーション重視の授業はあまり行われていないことが分かった。

(2)　我が国の俳句及び俳句教育に関する情報の発信

我が国の高校生に対する俳句教育の一環として位置づけることのできる「松山俳句甲子園」の取り組みとその成果について、Haiku North America Conference 2011、Haiku Canada Conference 2012、The 5th Haiku Pacific Rim conference 2012 にて発表を行った。また、我が国において俳句を学ぶ上で、句会は重要な意味を持つ。その魅力や価値について、具体的な句会の例を取り上げながら、Haiku North America Conference 2013 にて、発表を行った。それらの発表は参加者に興味をもって受けとめられた。

(3)　俳句ワークショップの有用性の検証と俳句の指導法の検討

2013 年の４月にカナダ・トロント大学附属小学校（JICS）において、俳句の魅力やその教材価値を探っていくための試み（名称：俳句プロジェクト）に参画し、俳句の授業と、教師に対する俳句ワークショップを行った。それは、創作と鑑賞を取り入れたコミュケーション重視のワークショップである。

以下はその具体的な展開である。

①ワークショップの目的と流れを知る。
②俳句とはどのようなものか理解する。
③創作支援プリントをもとに、「取り合わせ」の技法で俳句を作る。
④作った俳句の中からひとつ提出する。
⑤俳句を全員で読み味わう。
⑥俳句ワークショップに対する感想や俳句の教育的価値を問うアンケートに答える。

アンケートの回答からは、ワークショップへの高い評価、そして、実感や納得、概念変化をともなった俳句観・教育観の広がりと深まり、さらに、読者の読みの重要性に関する気づきを確認することができた。具体的には、俳句の焦点は形式にあるのではなく作者の思いにある、五感や季語の使用は感情や思いの引き出しにつながる、風景やインスピレーションに関する読者の読みは、俳句理解を促進するなどの気づきである。このようなことから、本ワークショップの有用性が検証された。それとともに、さらなる俳句観・教育観の広がりと深まりのためには、そこで生じた疑問や問題を協同で考えていく場の保障や、教材価値を考えるための授業実践の場の保障が必要であることも確認された。また、俳句プロジェクトにおける協同で作り上げた授業からは、学習者に何が生まれているのかの見極めが、俳句指導を行っていく上で重要であることが確認された。

５．主な発表論文など

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①中西淳，北米におけるハイクワークショップの有用性，全国大学国語教育学会編『国語科教育』76 集，掲載予定，2014 年，査読有.

②中西淳，若者の芽／ Young Buds，国際俳句交流協会『HI』No.105，2013 年，pp.2-6，査読無.

③中西淳，北米におけるハイクの教材性の検討－国際交流を視野に入れて－，全国大学国語教育学会編『第 125 回広島大会研究発表要旨集　国語科教育研究』，2013 年，pp.175-178，査読無.

④中西淳，「ハイク創作に関する一考察―T. A. Carter 著『Lighting the Global Lantern』を手がかりとして―」，全国大学国語教育学会編『第 122 回筑波大会研究発表要旨集国語科教育研究』，2012 年，pp.109-112，査読無．

〔学会発表〕（計６件）

＜国内＞

①中西淳，北米におけるハイクの教材性の検討―国際交流を視野に入れて―，第 125 回全国大学国語教育学会広島大会，広島大学，2013 年 10 月 26 日．

②中西淳，ハイク創作に関する一考察－T.A.Carter 著『Lighting the Global Lantern』を手がかりとして－，第 122 回全国大学国語教育学会筑波大会，筑波大学，2012 年５月 26 日．

＜海外＞

③ Makoto Nakanishi，Kukai in Matsuyama －How people enjoy it －，Haiku North America Conference 2013，Long Beach，2013 年８月 15 日．

④ Makoto Nakanishi，Young Buds，The 5th Haiku Pacific Rim conference 2012，San Francisco，2012 年９月８日．

⑤ Makoto Nakanishi，Haiku by Japanese high school students in Haiku Koshien，Haiku Canada Conference 2012，Toronto，2012 年５月 19 日．

⑥ Makoto Nakanishi，Fight for Haiku!― The Annual Haiku Tournaments Fought by Nationwide High Schools in Matsuyama, Japan ―，Haiku North America Conference，Seattle，2011 年８月５日．

〔図書〕（計３件）

①位藤紀美子編『言語コミュニケーション能力を育てる－発達調査をふまえた国語教育実践の開発－』，世界思想社，2014 年，320 頁．

②全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』，学芸図書，2013 年，573 頁．

③全国大学国語教育学会編『新たな時代を拓く中学校・高等学校国語科教育研究』，学芸図書，2011 年，320 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

○取得状況（計　０件）

６．研究組織

(1)　研究代表者

中西　淳　（NAKANISHI　Makoto）

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：10263881

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし